

# 幼児期の教育を踏まえた小学校教育の在り方についての研究

～幼児期の「協同性」の姿を、小学校教育の「協働性」につなげる支援の工夫～

香美市立片地小学校 教諭 山本 なるみ  
高知県教育センター 主任指導主事 押川 朝子  
チーフ 難波江 明美

本研究の目的は、幼児期の「協同性」の姿を踏まえ、就学期における学習目標の達成をねらいとした「協働性」の姿につなげる支援の工夫を明らかにすることである。小学校第1学年の児童を対象に、「協同性」を育む保育者の支援を取り入れた検証授業を行い、教師の働きかけや児童の学びの姿を分析した。

その結果、幼児期の学びや経験を生かした環境設定をすること、「情緒的支援」を土台とした児童理解をし、児童の思いを生かした「情動的支援」や、考えをつなぐ「思考的支援」をすることが、「協働性」の姿を発揮させる支援の工夫になることが示唆された。

**<キーワード>** 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、協同性、協働性、学習目標、環境設定  
情緒的支援、情動的支援、思考的支援

## 1 研究目的

### (1) これからの子供たちに求められる「協働性」の力

現在、我が国は生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、変化が急速で予測が困難な時代に入ろうとしている。子供たちには様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力が求められている。このような流れを受け、平成29年改訂の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、人との関わりに関する領域<sup>1</sup>「人間関係」の中で、身近な人と親しみ、関わりを深めるのみならず、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わうことが「ねらい」に新たに記された。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」<sup>2</sup>（以下「10の姿」という）が新設され、その中の一つである「協同性」には、「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり、充実感をもってやり遂げるようになる」姿と書かれている。小学校学習指導要領解説（総則編）では、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるようにすることが必要であると示されており、保幼小接続の重要性が高まっている。遊びを通して獲得している「協同性」の姿を小学校教育にどのようにつないでいくのか、支援の工夫を考察することは意義のあることだと考える。

### (2) 幼児期の「協同性」の姿

「10の姿」の「協同性」の解説では、「幼児は、友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めていく。その

<sup>1</sup> 幼児期に育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えた「ねらい」と、その「ねらい」を達成するために指導する事項である「内容」を示している。各領域は、幼児の発達の側面から「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域でまとめられており、指導を行う際に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を考慮することが新たに示された。

<sup>2</sup> 幼児期に育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿のこと。①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現 の10の姿であり、これを小学校と共有するなど連携を図り、幼児期の育ちや学びを小学校へ円滑に接続することが必要であると示された。

中で互いの思いや考えなどを共有し、次第に共通の目的をもつようになる。5歳児の後半には、その目的の実現に向けて、考えたことを相手に分かるように伝えながら、工夫したり、協力したり、充実感をもって幼児同士でやり遂げるようになる。」と述べられている。ここには、協同性の具体的な姿が以下のように示されている。

- ①多様な感情体験を味わう
- ②互いの思いや考えを共有する
- ③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりする

実際にB小学校に隣接するC保育園の5歳児の様子を観察していると、「協同性」の姿が以下のように見られた。

(8月2日 園児の姿) 保育室で教人が集まり、それぞれがブロックを組み立てて遊んでいたが、女兒の「②一緒につなげよう。」の言葉から、遊んでいたブロック遊びをやめ、みんなでドミノ倒しをして遊び始めた。ブロックを並べていくうちに、「②ゴールは椅子のところね。」と提案したり、③「〇〇くんはあっちから置いて。」「積木をください。」「僕が積木を運ぶね。」などと役割分担をしたりする姿があった。③途中で道が二手に分かれるようにしたり、カーブを作ったりと試行錯誤していく中で、①長くつなぐおもしろさやドミノが倒れる緊張感を、みんなで感じていた。

園児の姿を見てみると、協同性の①②③の姿が現れており、保育者が協同性の視点を大切にしてきた成果とみることができる。上記で示した「協同性」の三つの姿を小学校教育につなげることで、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力したり、様々な意見を交わす中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組んだりする姿につながっていくと考えられる。

### (3) 幼児期の「協同性」から小学校教育における「協働性」へ

幼児期の「協同性」の三つの姿と、目的に向かって工夫して取り組む小学校教育の姿をつなげるということは、「協働性」の姿を目指していくということである。佐藤ら(2015)は、「協同」と「協働」の違いについて理論的に整理している。どちらも力を合わせるという意味は同じとしつつも、「協同」は、互いに影響を及ぼすことであり、活動そのものにねらいがあるのに対して、「協働」は、互いに協力して目的を達成することであり、目的を達成することがねらいであると示している。学習目標への到達を目指して活動が展開されていく就学期においては、その目標を達成することがねらいとなる。小学校教育では、幼児期の「協同性」から「協働性」へとつないでいくことが求められる。

中教審答申(2008)において、思考力・判断力・表現力等を育むために不可欠なものとして、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動が挙げられた。これは上記で述べた「様々な意見を交わす中で新しい考えを生み出す姿」につながる活動であり、「協働性」の姿と捉えられる。この活動では、話し合いや意見交換など、相互の情報交換が必要となり、実際に授業に取り入れる場面は多くなってきている。しかし、鈴木(2011)は、話し合う内容が不明瞭なままグループ活動に移ることや、個々の考えを発表するだけで終わることを課題として指摘している。その要因として、子どもが「学びたい」「解決したい」と思える問題になっていないこと等を挙げている。つまり、「協同性」で示した②互いの思いや考えを共有する姿は見られるが、①多様な感情体験を味わう姿や、③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりする姿が見られないことが課題であると考えられる。①②③の姿は三つがそろって「協同性」の姿であるが、特に③については、目的に向けて試行錯誤する姿であり、学習目標の達成の姿につないでいくべき項目である。①②③の姿が小学校教育でも見られるようにすること、③については「協働性」の姿へとつないでいくことが授業改善で求められると言える。

### (4) 小学校教育の「協働性」の姿につなぐためには

以上のことから、幼児期に培った「協同性」の姿を小学校教育における「協働性」の姿へとつな

いでいくためには、話し合いやグループ活動に目的をもたせ、意図的に友達と関わらせる必要がある。特に1年生の学習においては、遊びを通して学んでいる幼児期の特性を生かし、「個人思考」「グループ活動」などと活動を区切るのではなく、教師が設定した環境の中で、児童が自然と個人思考し、友達と試行錯誤できるようにすることが大事なのではないかと考えた。

本研究では、「協同性」の三つの姿を、①多様な感情体験を味わう、②互いの思いや考えを共有する、③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりする、の三つの姿と押さえる。この三つの姿が生まれるような支援の工夫を明らかにするとともに、③については、どのような支援の工夫をすることで「協働性」の姿に向かうのかを見出していくこととする。

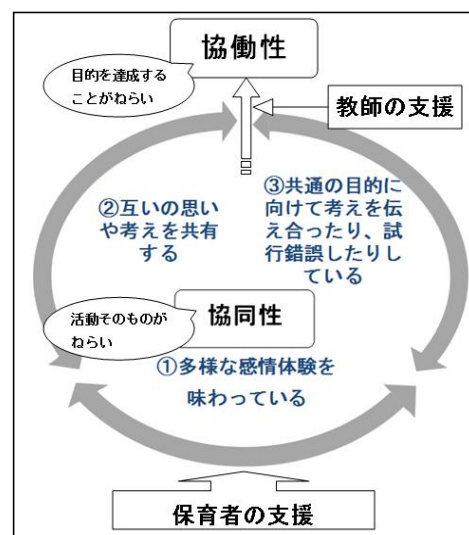


図1 研究のイメージ図

## 2 研究仮説

小学校第1学年の学習において、幼児期に培った「協同性」の姿を踏まえた支援を工夫することで、共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしながら学習に取り組む姿を生み、「協働性」の姿へと向かうであろう。

## 3 研究方法

### (1) 幼児期の学びを「協同性」の視点で調査

#### ア 「協同性」が育っている要因の考察

前述した通り、ドミノ倒しの場面で「協同性」の姿が見られた。そこで、なぜ協同性が育っているのか、その要因を考察した。

岡上(2015)は、幼児の関わり行動を支える作用として、教師の援助を四つの要素(情緒的支援、道具的支援、情報的支援、評価的支援)で示している。さらに、元木ら(2018)が示した「尋ねる、相談する」などの項目からなる思考的支援も加え、表1のように整理した。

#### イ 保育者からの聞き取り

現1年生が5歳児の頃の「協同性」の姿や学びの様子を聞き取った。内容を以下に述べる。

#### (ア) 国語科（「かんじのはなし」につながる姿）

- ・読み聞かせや身の回りのものなどから文字への興味・関心をもっている。「これ読めるよ」「ぼくはこんな字を書けるよ」と得意気に話している幼児の様子から、文字を知ることへの喜びが感じられる。
- ・文字に対する興味や関心を深めるために、5歳児でかるた作りをして遊んでいる。「あ」から始まる言葉を探したり、その言葉が出てくる短いお話を考えたりしている。幼児は相談し合ったり、友達の真似をしたり、時には保育者に支援してもらったりしながらかるたを完成させる。作ったかるたは、最後に「お披露目会」として全て掲示し、年下の友達に読み方を教えてあげたり、友達の作品の良さを感じたりしながら、達成感や充実感を味わっている。このような姿が、「10の姿」の「協同性」で挙げられている姿だと捉えた。また、真似して文字を読み書きしたり、お話をイメージして絵を描いたりする姿は、国語の内容とも関連がある。

表1 「協同性」を育む保育者の支援の工夫

情緒的支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児の気持ちを受け止める</li> <li>・ 共感的に理解する</li> <li>・ 安心させる</li> <li>・ 教師の素直な気持ちや感覚を表現する</li> </ul>
道具的支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 環境を構成する、教材を提示する</li> <li>・ 活動の手助けをする</li> <li>・ 危機的状況に介入する</li> </ul>
情報的支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びや活動等がより良くなるように提案する</li> <li>・ 確認する</li> <li>・ 情報を提供する</li> </ul>
評価的支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 承認、ほめる</li> <li>・ 正誤を伝える</li> <li>・ 注意する</li> </ul>
思考的支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 尋ねる、相談する</li> <li>・ 幼児の考えを生かす</li> <li>・ 繰り返す</li> </ul>

(イ) 算数科（「たしざん」につながる姿）

・身の回りのものや人数を数えたり、あわせていくつか考えたりする経験をしている。例えば、朝の集まりの時間にその日のクラスの人数を当番グループの友達と一緒に数えたり、プールで宝探しゲームをする際に自分のチームの宝を数えたりといった姿が見られる。また、すざらんテープで三つ編みを作る際には「この2本をこうして…」「ここをきゅっとしめて、下に通すよ」「この穴に通して結ぶよ」など、実物を見せながら数字を用いて友達に分かりやすく説明する姿がある。このように、数に対する感覚を身に付けている姿や、友達の困り感を受け止め、一緒に目的を実現しようとする姿は、友達と関わりながら工夫して計算の仕方を考えていく算数の学習活動と関連がある。

(2) 1年生の実態調査及び授業観察

時期：4月8日～19日

対象：A市立B小学校1年生3名

調査方法：入学直後の授業（国語「ひらがな」、算数「なかまづくりとかず」）の様子を、教室の前後に設置した2台のビデオカメラで児童の活動が見えるよう録画し、教師や児童の行動・発話を文字起こししたものを、教師の働きかけ、児童の行動・発話に分けカテゴリ分類する。

カテゴリ分類の方法については各項で説明する。なお、カテゴリ分類は研究者が中心となっていくが、B小学校の教諭による検討も加え、妥当性を担保した。

ア 教師の働きかけについての分析・検証

表1に示した、「協同性」を育む保育者の支援の工夫の5項目と、「説明・指示・確認等」「板書・範読等模範」「その他」で分析を行う（表2）。分析結果を図2・図3に示す。

表2 「教師の働きかけ」のカテゴリ

カテゴリ		内容
1 支援	a 情緒	気持ちを受け止める、共感的に理解する、安心させる、教師の素直な気持ちや感覚を表現する
	b 道具	環境を構成する、教材を提示する、活動の手助けをする、危機的状況に介入する
	c 情報	活動がより良くなるように提案する、確認する、情報を提供する
	d 評価	承認、ほめる、正誤を伝える、注意する
	e 思考	尋ねる、相談する、考えを生かす、繰り返す
2	説明・指示・確認等	学習の流れの説明、手順の指示、作業の確認、学習規律についての指示等
3	板書・範読等模範	黒板への板書、掲示物への記入、範読等
4	その他	「はい」「いいえ」で答えられる質問、プリントの配付、返事等

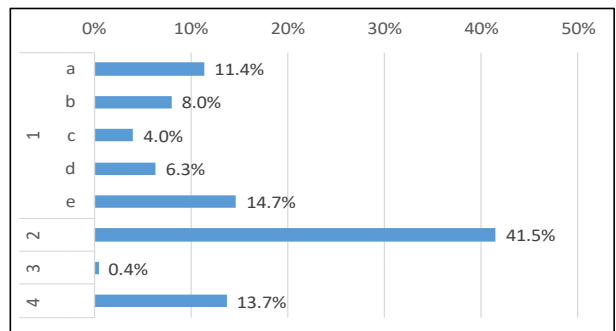
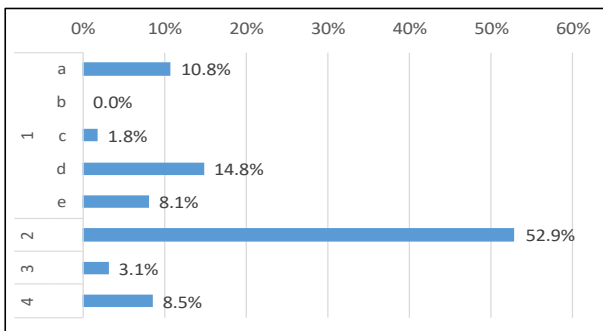


図2 国語科「教師の働きかけ」のカテゴリ別出現率

図3 算数科「教師の働きかけ」のカテゴリ別出現率

国語科・算数科ともに最も出現率が高かったのは「2 説明・指示・確認等」であった。支援においては国語・算数でばらつきはあるが、「a 情緒的支援」「d 評価的支援」「e 思考的支援」は一定数見られた。これらの姿が見られた要因としては、入学直後に安心して学校生活や学習に向か

えるよう、一人一人に対する理解に基づいた教師対児童という丁寧なやり取りが多かったことが挙げられる。

#### イ 児童の行動・発話についての分析・検証

「協同性」の三つの姿と主体性等の項目で分類する。また、これまでの研究で、児童の「単純な返答」の割合が少ないと児童が主体的な学習をする傾向にある（竹村ら、2014）と示されていることから、「単純な返答」と、さらに授業と関係のない内容として「その他」を入れた6項目で分析を行う（表3）。その結果を図4・図5に示す。

表3 「児童の行動・発話」のカテゴリー

カテゴリー	内容
①多様な感情体験を味わっている	疑問、喜び、悔しさ、驚き、葛藤等の感情を味わっている等
②互いの思いや考えを共有している	感じたこと、考えたことを話したり書いたり、身振り手振りで伝えたりする、比較したり予想したりして答える等
③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている	活動の中で友達と役割分担をする、もっとおもしろくなるように工夫する、問題点に気付いて修正しようとする、課題達成に向けて繰り返し取り組む、友達の考えに続けて話す、反論する、協力して学習する等
④課題に意欲的に取り組んでいる	進んで挙手、直ぐに反応する、「～したい」と取り組む等
⑤単純な返答	「はい」「いいえ」単純な返事、板書を読む等
⑥その他	授業と直接関係ない内容

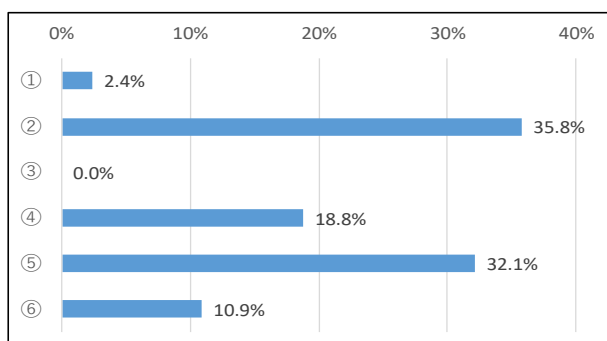


図4 国語科「児童の行動・発話」のカテゴリー別出現率

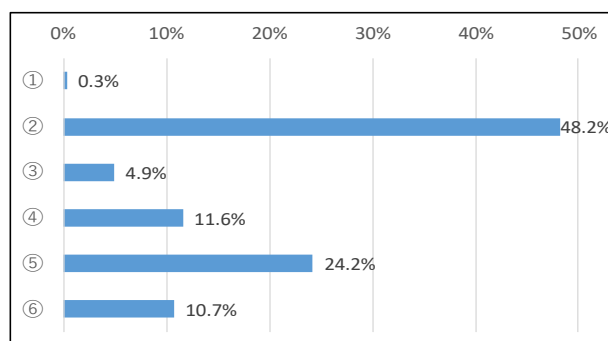


図5 算数科「児童の行動・発話」のカテゴリー別出現率

国語科・算数科ともに「②互いの思いや考えを共有している」「⑤単純な返答」の出現率が高く、「①多様な感情体験を味わっている」「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」の出現率が低かった。その要因としては、教師が自分の思いを表現できる機会を多く設定し、表現したことを認め評価していたので、児童はもっと聞いてもらいたいと主に教師に向けて思いを伝えていたこと、教師の説明・指示・確認等が多く、学習目標の達成に向けて友達と関わる必然性を児童が感じられなかったことが挙げられる。

津田(2009)は、「一人一人の今を大切にすることが協同性を育むことにつながる」と記しており、主体性の大切さを示している。また、山崎ら(2019)は、「主体的な学びの姿」を生む学習環境の工夫の一つとして「思考を深める発問の工夫(つなげる)」を挙げており、児童は友達の考えを聞いて、さらに想像を広げることができるとしている。つまり、「協同性」を育むためには主体性が大切であり、思考を深め「協働性」の姿へ向かうためには、教師は考えをつなぐ発問を工夫することが求められる。さらに岡上は、5歳児が自分たちで目的を実現していくための教師の援助として、「情動的支援」の重要性を示している。

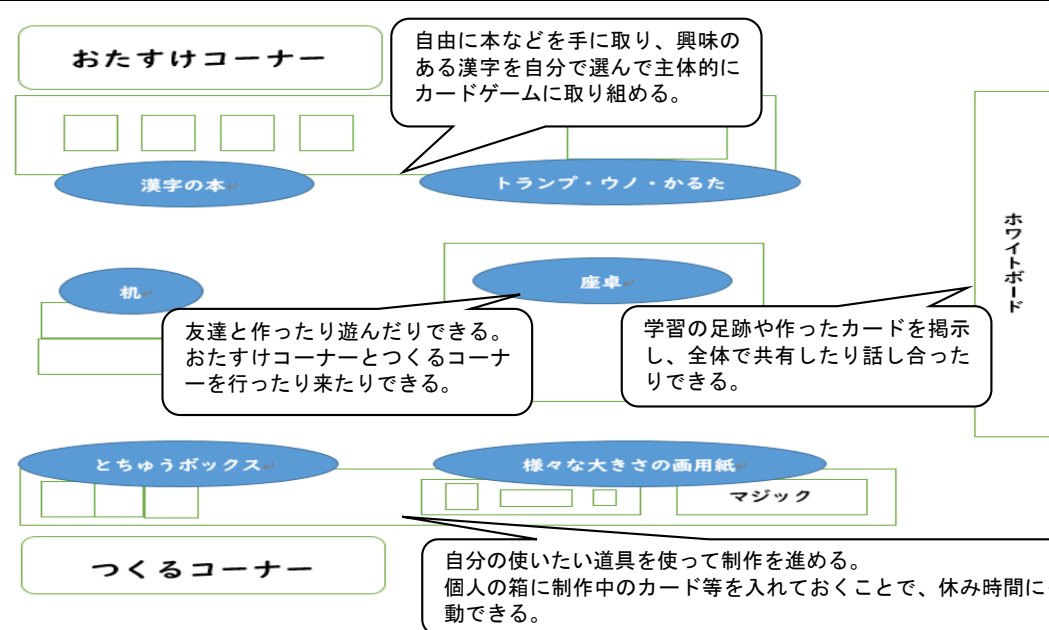
これらのことから、検証授業では、まず主体的な姿である「④課題に意欲的に取り組んでいる」

姿を引き出せるようにする。そして感情体験を味わいながら、学習目標の達成に向けて友達と関わる必然性を児童が感じられるようにし、「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」姿が多く見られるようにする。そのための工夫を以下に記す。

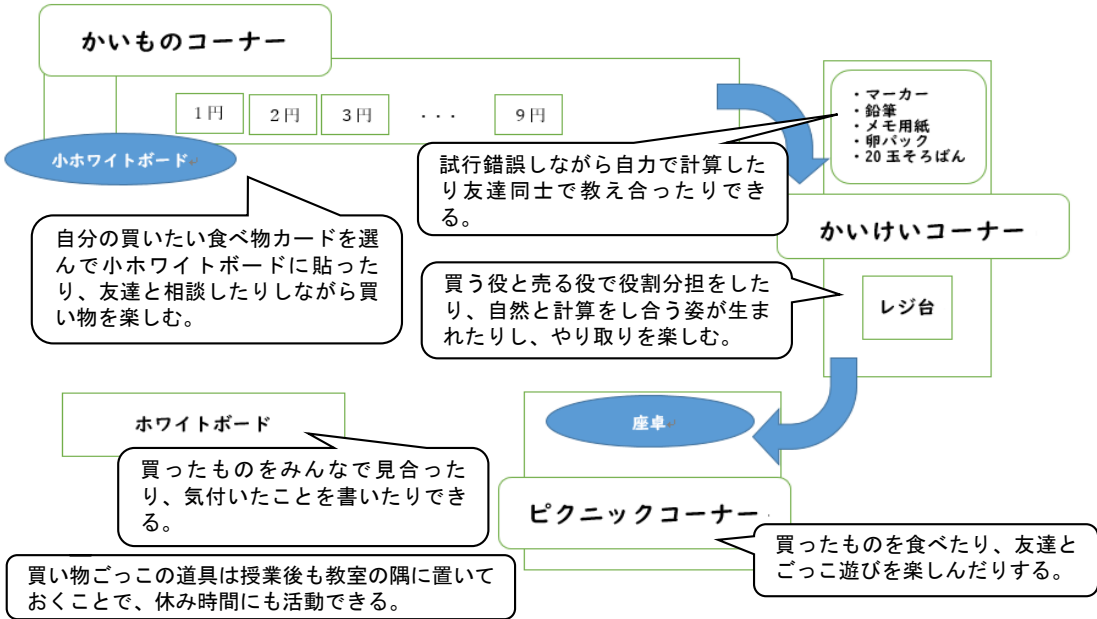
「児童の行動・発話」の カテゴリー	教師の働きかけ
④課題に意欲的に取り組んでいる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「環境設定」…幼児期の学びを取り入れ、自らやってみたいと思えるような環境を取り入れる。</li> <li>・意欲的に活動する中で多様な感情体験を味わわせ、友達と関わる良さや必然性を感じられるようにする。</li> </ul>
③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「思考的支援」…試行錯誤しながら学習目標の達成に向かうために、特に児童の考えをつなぐ発問を意識する。全体共有の場面だけでなく、環境設定の段階で友達との関わりが生まれる場を仕組み、授業では関わっている場面を捉えて支援に入るようにする。</li> <li>・「情動的支援」…指示にならないよう、児童のこれまでの経験や既有知識を生かし、学習目標と照らし合わせながら児童の思いに沿った活動ができるようにする。</li> </ul>

### (3) 「協働性」の姿を発揮できる授業計画の作成と実施

#### ア 国語科「かんじのはなし」

目単 標元	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字の成り立ちに興味をもち、漢字の読み方や書き方を知って、正しく使うことができる。</li> </ul>
幼児期の 学びを生かした 環境設定の 工夫	<p>・かるたを作って遊ぶ経験をしている。絵本の中に振り仮名付きで出ている漢字を読んだり、日常生活の様々な場面で漢字交じりの表記を目にしたしたりしている。</p> <p>⇒漢字に興味をもっている姿を生かすことで、「調べたい」「書けるようになりたい」という主体性ととも に、漢字の成り立ちに着目するなど漢字への興味をさらに広げ、深められるようにしていきたい。</p> <p>◎「オリジナル漢字カード」で遊んだり自分たちで作ったりする活動を行う。</p>  <p>自由に本などを手に取り、興味のある漢字を自分で選んで主体的にカードゲームに取り組める。</p> <p>友達と作ったり遊んだりできる。おたすけコーナーとつくるコーナーを行ったり来たりできる。</p> <p>学習の足跡や作ったカードを掲示し、全体で共有したり話し合ったりできる。</p> <p>自分の使いたい道具を使って制作を進める。個人の箱に制作中のカード等を入れておくことで、休み時間にも活動できる。</p>
単元 の流れ	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 漢字カードゲームで遊び、成り立ちに興味をもつ。</li> <li>2. オリジナル漢字カードを作り、友達と遊ぶ。</li> <li>3. 漢字カードを作ったり遊んだりした経験や気付きをもとに、成り立ちを意識して漢字を正しく書く。</li> </ol>

## イ 算数科「たしざん」

<p>単元 目標</p>	<p>・1位数どうしの繰り上がりのある加法計算の仕方を考え理解し、確実にできるようにするとともに、それを用いることができる。</p>
<p>幼児期の学びを生かした 環境設定の工夫</p>	<p>・繰り上がりのある計算だと意識はしていないが、繰り上がりのある計算について数え足し等をして自力で計算している。 ⇒必要感をもって数える中で、友達と計算の仕方を考え、繰り上がりの計算を理解できるようにしていきたい。 ◎買い物ごっこを行う中で、一緒に計算したり、金額内に収まっているか確認したりする姿が生まれるようにしていく。</p> 
<p>単元の 流れ</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 既習事項を使って自分なりに計算しながら買い物ごっこをして遊ぶ。</li> <li>2. 1で繰り上がりのたしざん場面に出合い、既習事項を生かして計算方法を考える。</li> <li>3. 考えた計算方法をもとに、10のまとまりを作って計算する。</li> <li>4. 本単元に身に付けた力をもとに、もう一度買い物ごっこをして遊ぶ。</li> </ol>

## 4 結果と考察

### (1) 検証授業の分析・検証

時期：10月8日～18日

対象：A市立B小学校1年生3名

分析方法：4月の実態調査と同様にカテゴリ分類し、4月の数値と比較し分析する。

### ア 教師の働きかけについての分析・検証

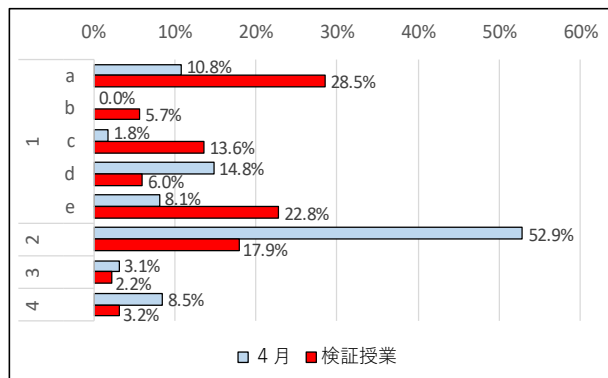


図6 国語科「教師の働きかけ」のカテゴリ別出現率

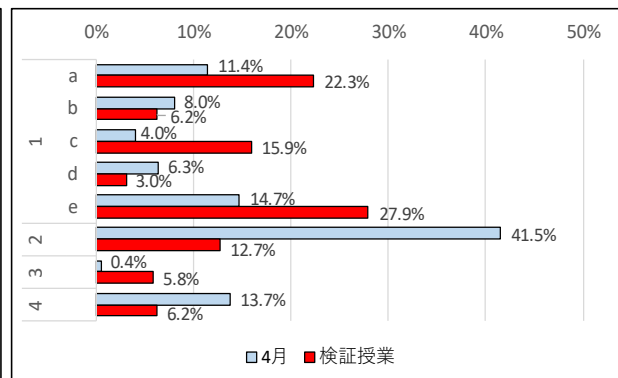


図7 算数科「教師の働きかけ」のカテゴリ別出現率

国語科・算数科ともに「2 説明・指示・確認等」の割合が減っていることが分かる（図6、図7）。幼児期の学びを生かせるような環境設定にすることで、児童が自ら関わりたい、友達と相談したいと思える活動にし、教師は楽しいことに没頭する中で生じた驚きや気付きを大切に授業を心掛けたためだと考える。そのため、支援の中では「a 情緒的支援」「c 情動的支援」「e 思考的支援」の割合が増加した。活動の正誤を伝えるのではなく、共感的な理解を心掛けたことが「a 情緒的支援」の増加につながり、指示ではなく児童の思いを確認しながら目標の達成へ向かえるようにしたことが「c 情動的支援」の増加につながったのではないと思われる。また、「e 思考的支援」の詳細を分析すると、4月と比べて児童の考えをつなぐ発問が増加していた。

## イ 児童の行動・発話についての分析・検証

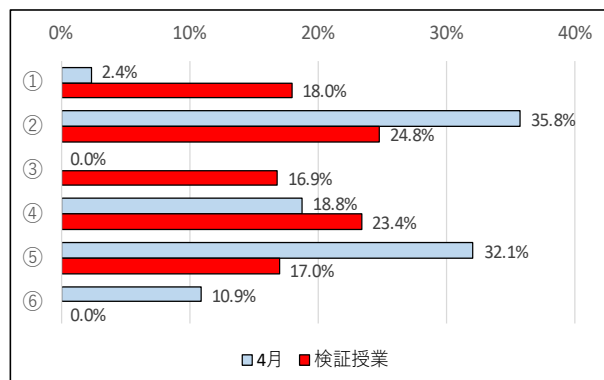


図8 国語科「児童の行動・発話」の категория別出現率

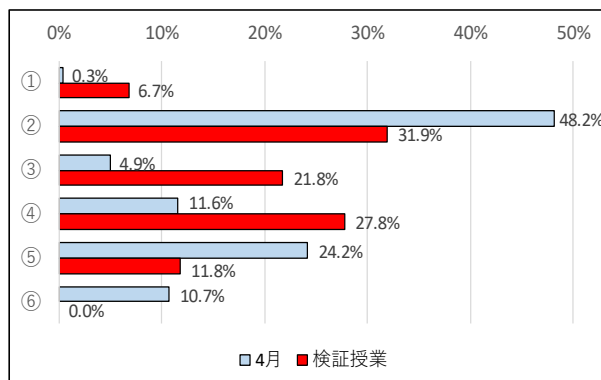


図9 算数科「児童の行動・発話」の категория別出現率

4月と比較すると、国語科、算数科ともに「②互いの思いや考えを共有している」「⑤単純な返答」の割合が減り、「①多様な感情体験を味わっている」「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」「④課題に意欲的に取り組んでいる」の割合が増加したことが分かる（図8、図9）。4月は、問われたことに答えるという一問一答のような考えの共有が多かったが、幼児期の学びを生かしつつ、児童が試したり考えたりできるような環境設定にしたことで、主体的に学習に取り組む姿や多様な感情体験を味わう姿につながった。さらにカードゲームや買い物ごっこという学習自体が友達と関わる必然性のある活動であったため、自然と「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」姿が多くなったのではないかと考える。また、友達と試行錯誤する姿は、環境設定だけでなく、教師の「a 情緒的支援」「c 情動的支援」「e 思考的支援」によっても引き出されていることが明らかになった。

## (2) 「協働性」の姿が見られた場面とその要因の考察

例として、算数科第1時の様子を挙げる（報告書3(3)イ）。また、本時における教師の活動場所別カテゴリーの割合を図10に示す。

児童同士のやり取りや、授業後に「もっとやりたい」と取り組み続ける姿勢、アンケートで「今日の勉強は楽しいな、やって良かったなと思えましたか。」の問いに全員が肯定的な回答をしていることから、本時の買い物ごっこは児童の主体的な姿を引き出し、思わず友達と関わりたいと思える環境であったと考えられる。さらに、どの活動場所で「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」姿が多く見られ

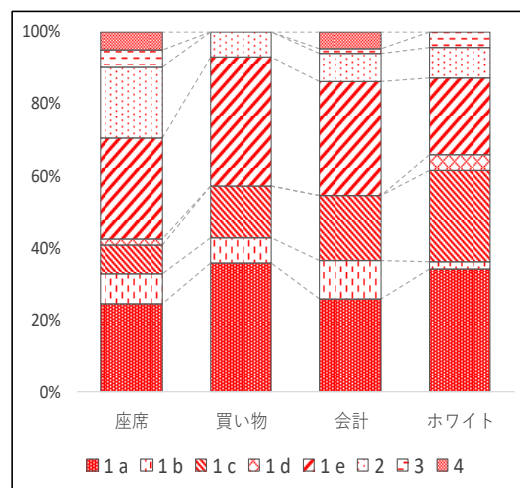


図10 算数第1時の教師の場所別カテゴリーの割合



たのか分析を行ったところ、全員が会計コーナーであった。会計コーナーは、試行錯誤しながら自力で計算したり、友達同士で教え合ったりする姿や、買う役と売る役で役割分担をし、自然と計算をするなどのやり取りを楽しむ姿をねらって設定した。会計コーナーにおける教師の働きかけとしては、図 10 に示している通り、多い順に「e 思考的支援」「a 情緒的支援」「c 情動的支援」となっており、他の活動場所でもこの3項目が多く見られた。

児童は買い物場面をすぐにイメージし、レジ係として友達の意見を聞きながら、既習事項を使って積極的にアドバイスをしていた。またある児童は、最初は買い物の意味を理解できず、買いたい物を好きなだけ買おうとしていたが、友達の発言を受けて計算しなければならないことを意識し始めた。さらに、友達とのやり取りを受けて6+6の計算をしなければならないことに気付き、10を超えそうだという見通しをもち、友達の指を借りてまで数え足しをしようとしていた。

商品を置いている買い物コーナーでも、友達と計算する姿は見られたが、レジ係がいる会計コーナーの方が、式に表したり、本当に合っているのか確認したりと、確実に計算する姿が見られた。これらのことから、会計コーナーは、児童にとって、「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」姿を引き出し、「協働性」の姿を発揮できる場であったと考えられる。

友達同士で試行錯誤する姿が見られた一方で、買い物場面を具体的にイメージできず戸惑っている児童も見られたので、友達との関わりを大切にしつつ表4のような支援を行った。児童は買い物場面のイメージを少しずつ豊かにしていき、全体の場で計算の仕方を発表できた。また、授業後アンケートで「自分から勉強に取り組めなかった」が、「工夫したり友達と協力したりできた」と感じていることから、友達との関わりや自分を認めてくれる場が、計算の仕方を見出すきっかけとなり、本時の学習目標の達成へと向かったと考えられる。このことから、「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」姿が最も見られた会計コーナーや、自分を認めてくれる場となったホワイトボードは、「協働性」の姿を発揮できる場であったと考えられる。

表4 買い物場面をイメージしづらい児童への支援

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>お金の概念の確認</b> 10円玉模型を使っていたが、1円玉模型10枚で10円だということを確認し、①6円の商品を買ったら6枚使う。②あと4円使える。③計算式は6+4=10。というように順を追って理解できるようにした。</li> <li>・ <b>レジ係での計算の仕方のヒント</b> レジ係の仕事に戸惑っていたため、計算式のヒントを与え、商品に書かれている値段を足せばよいことに気付かせるようにした。</li> <li>・ <b>全体での評価</b> 計算方法(途中式を書いておく)を具体的に考え、発表することができたので、全体の場で認め、意欲が継続するようにした。</li> </ul>
---

次に、「協働性」の姿につながっていると思われる教師の主な働きかけとその考察を表5に示す。

表5 「協働性」の姿につながっていると思われる教師の主な働きかけとその考察

教師の発話・行動	カテゴリー分類	考察
・先生、意味分かったよ。最後をつなぎたいんじゃない？	1 ac	・児童の言葉や行動の足りない部分を補い、全体に返すことで、理解を促している。
・1円玉模型を使ってC児と一緒に計算する。	1 b	・個別支援によって、協働的に学習に取り組む姿を支えている。
・6+...	1 b	・児童の思考の手助けとなるよう、ヒントを与えて助走をつけさせる。
・商品カードを並び替える。	1 bc	・児童が無意識に行っていたことを意識化させている。 ・児童の思考を可視化することで、理解を促している。
・拍手などの態度や表情、赤ペン指導等。	1 d	・言葉だけでなく、さまざまな方法で評価することで行動を価値づけ、意欲を喚起している。
・似ているなど思うところはありますか？	1 e	・類似点・相違点を問うことで、個人の学びを全体のものにしている。

表5から、「協働性」を育む支援のaからe全てが「協働性」の姿を支えていることが分かるが、前述の通り、今回の検証授業においては「a 情緒的支援」「c 情動的支援」「e 思考的支援」が多く表出している。学習目標の達成に向け、「a 情緒的支援」を土台とした児童理解をし、児童の思いを生かした「c 情動的支援」や、個人の考えを全体へとつなぐ「e 思考的支援」を組み合わせることで、友達と試行錯誤しながら「協働性」の姿へと向かっていくと考えられる。

考えをつなぐ「e 思考的支援」については、具体的な教師の言葉がけの例を表6に示す。学習目標や児童の実態に応じて思考的支援は変わってくる。表6のねらいを参考に言葉がけを工夫することで、「協働性」が高まっていくと考えられる。

表6 充実した話し合いにするための、考えをつなぐ教師の言葉がけ

教師の言葉がけ	ねらい
～さんのよいところはどこですか。	発見
～さんはどうして、このような考えが浮かんだのだと思いますか。	推測
～さんの考えはどういうことですか。	要約
～さんの考えの続きが分かりますか。	予想
～さんの気持ちが分かりますか。	共感
ヒントが言えますか。	補助
～さんの説明をもう一度言えますか。	再生

※福島県教育庁県北教育事務所(平成31年)「主体的・対話的で深い学びの実現へ向けて」参照

本時の授業の改善点としては、幼児期の経験とつなぎきれていなかったことが挙げられる。買い物場面をイメージしづらかった児童がいた要因として、これまでの買い物の経験との乖離があった。保育のバザーでは10円で一つの商品と交換という一対一のやり取りだったが、今回は1～9円の商品という非日常的な金額の商品を、金額ぴったりになるように買うという活動だった。また、幼児期の買い物ごっこは、自分たちで商品を売ったり買ったりしたいという思いから遊びがスタートするが、今回は教師が準備した絵カードでのやり取りであり、さらに買い物コーナーと会計コーナーが分かれていたため、友達と関わる場面が少なくなってしまった。図工と関連させて商品を自分たちで作ったり、コーナーを共有したりすることで、買い物ごっこへの思いが膨らみ、計算する必然性が生まれ、より密に友達と関わりながら本時の目標へと向かえたのではないかと考える。

### (3) 授業後の児童の様子

授業後の児童の様子を1年担任から聞き取った。国語科「かんじのはなし」では、漢字の成り立ちを意識できるよう、オリジナル漢字カードを作ったりゲームをしたりする活動を行ったが、授業後も継続して成り立ちに着目した漢字学習を進めている。児童は機械的に覚えるのではなく、形や意味を押さえて覚えているようで、漢字の定着が図られている。また、算数科では、計算を苦手としていた児童の成長が見られているという。検証授業前はたしざんが苦手だったが、検証授業後には繰り返しの有無に関わらず、理解が定着してきた。要因として、買い物ごっこがきっかけとなり計算が楽しくなったこと、家庭学習でもたしざんを積極的に解いていること、友達と関わり合いながら学んでいることを担任は挙げた。また、友達との関わりへの意識に変容があった児童もいる。検証授業前のアンケートでは、学級の友達に関する質問である「話を聞いてくれる」「親切にしてくれる」「話を最後まで聞いている」「困っているときに助けようとしている」の項目で否定的な回答をしていたが、検証授業後には肯定的な回答へと変化した。友達と試行錯誤しながら学習を進める中で、話を聞く大切さを学び、友達への思いやりや助け合いなどの姿が育ってきたのではないかと考えられる。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

成果として2点挙げる。

1点目は、児童の学びの姿の変容である。学習目標の達成に向け、幼児期の学びを生かした環境設定をすること、「情緒的支援」を土台とした児童理解をし、児童の思いを生かした「情動的支援」や、考えをつなぐ「思考的支援」を組み合わせることで、「協働性」の姿が見られるようになった。

2点目は、幼児期の教育から学ぶことができたことである。本研究は、まず幼児期における「協同性」の三つの姿を育む支援の工夫を明らかにしてきたが、保育者から多くのことを学ばせていただいた。

「協同性」を育む具体的な支援や、現1年生が5歳児のときにどのような学びを経験しているのかを知り、検証授業に生かすことができた。これまでの保幼小接続は、子供同士の交流活動や、いかに小学校生活に慣れさせるのかが主な取組であったように思う。

今回の研究で、「幼児期の教育を生かす」という意識の転換ができたことは、授業者として大きな成果であり、小学校教育へ「つなぐ」支援が見えるようになってきた。

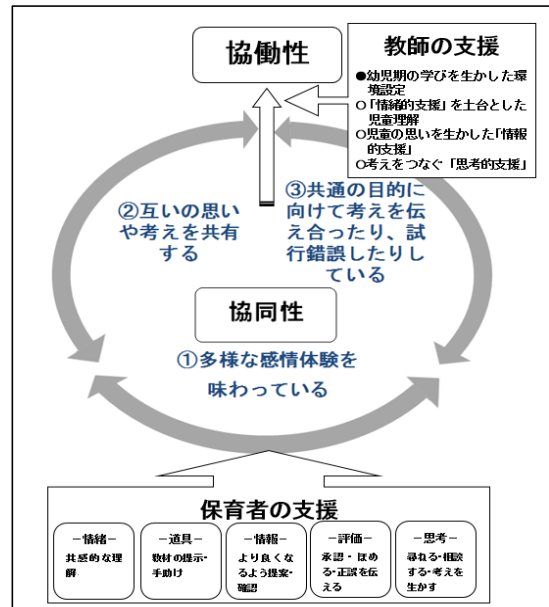


図12 「協同性」から「協働性」へつなぐ教師の支援

### (2) 課題

課題は2点ある。

1点目は、「協働性」の姿の多様性にある。今回は幼児期の協同性を三つの姿で捉えて検証・考察を行った。学習目標の達成の姿につないでいくべき項目である「③共通の目的に向けて考えを伝え合ったり、試行錯誤したりしている」姿については、環境設定や声かけ等、教師の支援によって多く見られるようになったが、その姿をさらに高めるためには、各教科で情緒面やスキル面を鍛えていく必要がある。今後現場で実践する際には、試行錯誤する姿がより高度になっていくよう、各教科の「協働性」に関する事項と関連を図っていくとともに、各教科の枠を超えて様々な場面で「協働性」が見られるよう取り組んでいく必要がある。

2点目は、「10の姿」との関連をどのように捉えるかということである。今回は「協同性」を取り上げたが、それ以外にも「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」等、様々な姿が検証授業で見られた。「10の姿」はそれぞれに共通して絡んでいる項目があるので、「協同性」を意識しただけでも様々な姿を引き出すことができる。これらの姿を小学校教育へどのように生かしていけばよいのかは検討していく必要がある。平成29年告示の小学校学習指導要領では、乳幼児期から小・中・高までの18年間の育ちと学びを見通した資質・能力が整理されたが、その育ちと学びをつなぐ一つが保幼小接続である。このことを考えると、保幼小接続は1年担任のみならず学校として組織的に取り組み、共通理解を図っていく必要がある。「10の姿」が具体的に小学校のどのような場で生かされるのか、また指導する際にはどのようなことに留意していけばよいのか、今後も保育者から学び、よりよい接続を目指していきたい。

### 【参考・引用文献】

中央教育審議会(平成20年):幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について

文部科学省(平成 29 年)：小学校学習指導要領解説 総則編  
文部科学省(平成 29 年)：小学校学習指導要領解説 国語編  
文部科学省(平成 29 年)：小学校学習指導要領解説 算数編  
文部科学省(平成 29 年)：小学校学習指導要領解説 生活編  
文部科学省(平成 30 年)：幼稚園教育要領解説  
内閣府・文部科学省・厚生労働省(平成 30 年)：幼保連携型認定こども園教育・保育要領  
厚生労働省(平成 30 年)：保育所保育指針  
高知県教育委員会(平成 30 年)：高知県保幼小接続期実践プラン  
福島県教育庁県北教育事務所(平成 31 年)：主体的・対話的で深い学びの実現へ向けて  
川田学・津田千明(2009)：幼児期における協同性とその援助の視点を探る  
嶋野道弘・鈴木功一(2011)：多様な考えを尊重した学び合いが子供の思考を促す、VIEW21((株)ベネッセ  
コーポレーション)、Vol. 2、No. 29、pp4-9  
岡上直子(2015)：幼稚園における協同性を育む指導の在り方、初等教育資料(東洋館出版社)、平成 26 年  
11 月号 (No.919)、pp82-89  
佐藤哲也・田井敦子・畑中ルミ・赤木公子(2015)：遊びの協同性を促す実践的視座  
竹村彩乃・尾中映里(2014)：保育所・幼稚園と小学校の接続に関する研究～学ぶ力を育む保幼小接続期  
カリキュラムの在り方について～、平成 25 年度研究紀要、高知県教育センター、pp2-13  
元木加奈子・難波江明美・岡林律子(2018)：児童の保育所・幼稚園等の経験を生かした小学校教育の指  
導の在り方についての研究—幼児教育の特性を生かした学びの連続性がある指導の工夫—、平成 29  
年度研究紀要、高知県教育センター、pp2-13  
山崎理恵・難波江明美・岡林律子(2019)：幼児期の特性を生かした接続期教育の在り方についての研究  
—幼児期に培った「主体的な学びの姿」を小学校教育で発揮できるための学習環境の工夫—、平成  
30 年度研究紀要、高知県教育センター、pp2-17